



2025年（令和7年）
7月号（No. 962）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和7年度通常総会を開催 理念の浸透により新生JACを目指す

6月21日、日本山岳会令和7年度通常総会が東京・四谷の主婦会館・プラザエフで開催された。会場には役員や会員72名が出席し、委任状並びに議決権行使書提出者を含め「令和6年度事業報告」「令和6年度決算報告」「令和7、8年度役員の選任」を審議、いずれも原案どおり可決・承認された。

会場には役員16名のほか56名の会員、合計72名が出席した。

冒頭に橋本会長から総会出席への謝礼があった。本年度が日本山岳会創立120周年であること、新たにスローガン、ビジョン、ミッションを策定し、会報に発表したことが報告された。これを踏まえ、持続可能な運営体制の構築や高齢化への対応、活動の活性化に取り組んでおり、東京支部の設立

や国際交流の再開など、活動に新たな展開が見られるという。現在、記念事業の各種企画も進行中であり、節目の年にふさわしい取り組みを通じて今後の発展を目指したい、との意向が述べられた。

次に会長が議長となり、審議、報告などが行なわれた。最初に定数の確認があり、「出席者84名、委任状提出65名、議決権行使書提出2639名の合計2788名。総

目次

令和7年度通常総会を開催 理念の浸透により新生JACを目指す ……	1
支部長が代りました ……	4
第79回ウェストン祭を開催 ……	6
追悼 ……	8
山の名著再読 ……	10
ジョージア・メスティアで コーカサスの桜植樹祭を挙行政 ……	12
東西南北 ……	13
図書紹介 ……	14
会務報告 ……	17
ルーム日誌 ……	17
会員異動 ……	18
INFORMATION ……	18
新入会員 ……	19
編集後記 ……	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

会員数3999名に対し69・7%となっており、本総会は有効に成立している」と久保田賢次・総務担当理事から回答があった。

《審議事項》

◆第1号議案 令和6年度事業報告(案)の承認の件

◆第2号議案 令和6年度決算報告(案)の承認の件

長島泰博・総務担当常務理事から事業報告の要旨の説明があった。昨年度末に取りまとめた「日本山岳会の理念」に基づき会の風土を変えるべくいくつかの施策を実施したことを中心に説明があった。具体的には入会金の減額（2万円を1万円に）を行なったこと、準会員の在籍期間の見直し（3年から1年に）たこと、東京支部の設立を

行なったことなど。

昨今は日本山岳会のことを知らない登山者も多く、広報活動を積極的に行なうための広報委員会設置の説明があった。ある調査では日本山岳会のことを知る人は10人に1人という結果もあるようであり、思い切った取り組みを実施しているが、理念を浸透させていくことは一朝一夕で実現できるものでなく、会員に対しては長い目で見ていただきたい、と話があった。続いて、南久松宏光・財務担当常務理事から決算報告があった。

当期の概況としては一般正味財産増減額が△1379万3000円と大きな赤字となった。前期、前々期に比べ赤字幅が拡大し、財政危機感がさらに昂進した。原因としては、創立120周年記念事

業の遂行のほか、寄附金獲得の落込みがあり、過去10年の中で平成27年度の△259万1千800円に次ぐ赤字額である。

収益の状況については、当期の経常収益の合計は946万700円となった。前期が974万7800円なので、281万円の減収である。内容を見ると、受取入会金は前期比△94万5000円、受取会費は同△102万2000円となった。各支部および本部の会員獲得努力の効果発現までに時間が掛かっている。

事業収益は前期より219万9000円増加した。山研の利用収入増、本部および支部の登山教室などの参加費増などによる。受取寄附金については前期比44万6000円減の212万69000円になった。会員には創立120周年記念事業募金にご協力いただいたが、企業や会員外からの寄附獲得が難しい状況である。

事業費・管理費の状況は、事業費は前期の963万39000円から当期は1億494万2000円へと860万2000円増加した。創立120周年記念事業の実施により旅費交通費、支払手数料、

通信運搬費などが増加した。一方、出版事業費は極力抑え、印刷製本費全体では143万円減少している。管理費は前期比66万1000円減となった。

貸借対照表の状況については、当期末の総資産は2億595万9400円であり、前期末比1642万6000円の減少であった（△6%）。流動資産は4340万2000円であり、うち手元の現金預金が809万1000円減少した。特定資産が492万8000円減少しているが、主に創立120周年記念事業の実施による取り崩しによる。負債の部では大きな変動はない。

審議の結果、第1号議案は出席者、委任状、議決権行使書の合計2938票に対し、議決権行使書での賛成が2062票と70・18%に達しているため、賛成多数で承認された。

第2号議案も出席者、委任状、議決権行使書の合計2938票に対し、議決権行使書での賛成が2061票と70・15%に達しているため、賛成多数で承認された。

◆第3号議案 令和7、8年度役員を選任の件

理事候補14名、監事候補2名について長島常務理事から紹介があった。また、今期から公益法人の法律の改正で会員外から外部理事、外部監事を採用することになったことの説明があった。

第3号議案も出席者、委任状、議決権行使書の合計2938票に対し、議決権行使書での賛成が2048票と69・70%に達しているため、賛成多数で承認された。

《報告事項》

◆令和6年度事業計画および予算の件

長島常務理事から令和6年度事業計画の説明があった。

郵便料金の値上げによる会報の発送費用については経費に占める割合も大きい。電子データ利用は現在700名程度で、引き続き協力をお願いしたい、と話があった。

一方で郵送を辞退していただいた方のために、その資金を元に会員証などの表示ができるアプリを開発し、会員の利便性の向上を図る予定であることも補足された。

南久松常務理事から令和6年度事業予算の説明があった。

令和7年度は創立120周年記

念事業の最終年度であり、これを成功裡に締めくくり本会の継続・発展に寄与できるよう積極的姿勢での予算編成とした。すなわち、収益予算1億366万7000円、費用予算1億282万18000円である。ただし、予算の編成は2、3月に行なわれるため収益・費用で見積もりの余地が大きく、その後の情勢を考慮すると収益・費用の双方が若干膨らみ過ぎていることは否めない。

◆創立120周年記念事業の報告
長島常務理事から創立120周年記念行事も終盤に向かつており、今年の12月に海外から関係者を招き式典を開催すること、そのための寄附の依頼について説明があった。

◆新任支部長、退任支部長の紹介
橋本会長から新任支部長と退任支部長の紹介、新しく設立された東京支部の紹介もあった。

《質疑応答》

これらの議事と報告を受け、会場からは以下の質問があった。

・ 俵山守男会員（9742）

広報活動に力を入れるとあるが、広告料が増えるのではないか。

・永田副会長

ここです上がっている広告費は会報などへの広告収入で、今回力を入れる広報活動とは別物である。広報活動により会への寄附や賛助金などの増加に結び付くことを期待している。

・長田義則会員(5465)

入会のために紹介者2名のうち1名が役員であるということで申込書を送き返された。この規定はなくなったと記憶しているが、どうなっているのか。

・長島常務理事

紹介者については理事会でも役員の紹介の有無、人数などについて見直しを検討した。紹介者については定款に明記されており、変更については慎重な検討が必要との結論になった。

・長田義則会員

基金の取り崩しについては感情論になるが、「先人たちの積み上げてきた資産を取り崩すな」と言いたい。

・長島常務理事

先人が残していただいた資金であることを認識して、無駄のないよう活用させていただきたい。

・黒川恵会員(7547)

財務状況を悪化させる予感として

寄附金の取り崩し242万9000円がある。指定寄附金の過年度分を当年度に充当させることは理解できないわけではないが、今後は各種基金の取り崩しを発生させてはならないと考える。小手先の資金繰りは財務悪化を進行させることになるかと考える。この点はどう考えるのか。

・南久松常務理事

特定資産については基金などの設定趣旨、寄附者の意図などにより利用目的が定められており、これに反した目的外の取り崩しはそもそもできない。当期に取り崩し、来期に取り崩す予定のものはこのルールに沿っている。取り崩し額を含めて行なった事業が本会の発展に寄与するものと考えている。

・黒川恵会員

財務改善策の効果が表われなかった場合、年度ごとに逼迫する手元資金減少を脱する方策はあるのか。経費削減の声掛けとコストカットだけで改善するのか。30年前、1995年以来改定されていない年会費の改定(値上げ)案について、理事会は排除する考えか。年会費の値上げについて会員の理解を求

めるべきと考えるが、理事会の見解は。また、入会金を半額にした効果はどこまで出ているのか。財務改善部会として令和5年10月に出した報告に対し回答が誠実とは言えなかった。どのように受け止めてきたのか。

・南久松常務理事

財務改善部会からの提案は理事会で検討させていただき、引き続き理事会で取り組むこととして2月に返答を行なっている。提案内容の骨子は会費の値上げの検討と納入した金額により議決権を保有するという案であった。

・橋本会長

体質の改善をせず会費を値上げしても財政健全化にはつながらず、会費の値上げは最後の手段だと考えている。

・熊崎和宏会員(9636)

日本山岳会が現在のようになってしまった原因は、公益法人化の選択に起因するのではないか。

・長島常務理事

一つの意見として受け取らせていただきます。

・安藤隆生会員(17274)

本部の役割を東京支部に担ってもらうという表現があるが、具体

的にどのような役割か。

・長島常務理事

東京に支部がなかった現状では、本部が首都圏会員のニーズを満たすことが必要であった。本部の業務を東京支部に移管するのではなく、支部がなかったため本部が行なっていた業務を支部で担ってほしい、ということである。

なお、当日指摘された文字の修正、数字の修正については、ホームページに正しく再掲示した。

《懇親会》

79名の参加があった。16時15分、橋本会長の乾杯によって始まり、にぎやかに宴が進んだ。約1時間の会食ののち、各支部や委員会からの挨拶・連絡の時間となり、神奈川支部・大槻新支部長の挨拶、引き継がれる山岳プロジェクトの坂井会員からの記念切手の紹介、自然保護委員会の久保田委員からの新潟県妙高市で開催される自然保護全国大会のお知らせ、関西支部の水谷支部長からの支部90周年記念式典のお知らせが続ぎ、18時前に静岡支部・諏訪部新支部長の中締め挨拶で散会となった。
(報告) 南久松宏光、長島泰博

支部長が代りました

青森支部長 大久保 勉さん

私は2011年から17年まで青森支部長でした。一応役員としての務めを卒業したと思っておりますが、図らずも再登板することになりました。改めて日本山岳会の抱える課題(会員減少、高齢化など)が浮き彫りになったのでは、と痛感させられています。

日本山岳会は、私が支部長に就任した翌年の12年から公益社団法人となりました。全国支部懇談会を兼ねた支部設立20周年記念行事などをこなしながら新法人制度への対応に努めてまいりましたが、会員減少、高齢化といった課題解決には至りませんでした。当時でも前進できるよう努めたいと思っています。前支部長・事務局長の頑張りで、若い人への接触が図



青森支部長 大久保 勉さん

られ、また、Noonを採り入れた講演会が開催されるなど、少しずつ光明が見えている兆しがあります。全国の会員の方々と交流を活性化させ、クラブライフを充実させていきたいと思っております。

私と山の関わりは、大学2年の夏休み明け、進級する学部・学科が決まるまでの空白期間を利用して、道東のヒッチハイクに出かけたことに起因しています。ウトロから羅臼に抜けるには山を越えれば近いと思い木下小屋に泊まりましたが、小屋のおばさんから「熊が出ているから危ない」と引き止められました。やむなく迂回しましたが、どうしても半島を横断したいという想いに駆られ、山の知識も装備も何もないまま、ビール瓶に水を詰めただけで登りました。1661mの頂上の白木の看板が今も目に焼き付いています。

青春の多感な時期で、眼下に広がる光景に畏敬の念を覚え、ずーっとたたずんでいました。これが私の山に対する原点で、たいした山歴はないのですが、人間は自然の中に生かされている小さな存在である、ということを意識して山に向き合っています。

宮城支部長 八尾 寛さん

12歳の夏、立山に登った思い出があります。そのころの私は、富山市の小学校に通っていたのですが、朝な夕なに立山連峰や剣岳を眺めるたびに、その雄大さと美しさに見飽きることはありませんでした。そして、一度は登ってみたいと憧れを募らせていました。

するとその年(1964年)、バス路線が立山室堂まで延伸されたではありませんか。室堂に降り立つと、雪と岩と緑のパノラマが私を包み込みました。初めて見る雪渓、可憐な高山植物。一ノ越に両親と弟を残し、兄と私は雄山の頂上へ向かいました。岩や石がごろごろしている道を喘ぎ喘ぎ登りましたが、雄山神社の前に立つと疲れはどこへやら飛んでいってしまいました。家族と登頂の喜びを語り合いながら室堂へ戻りました。

二度目の立山は、学生時代に友



宮城支部長 八尾 寛さん

人と2人で北アルプスを縦走したときです。京都駅から夜行急行「たてやま」、電車、バスを乗り継いで、有峰口から薬師沢小屋へ。翌日は雲ノ平を経て水晶小屋で2泊目。水晶岳の双耳峰から赤牛岳へ。読売新道を下って黒部湖を渡り、平ノ小屋で3泊目。五色ヶ原へ登り返し、立山連峰へ入りました。そして、その最高地点の大汝山まで行き、室堂へ下りました。彼方にそびえ立つ剣岳を眺め、少年のころの憧れが蘇ってきたのを憶えています。

「山への憧れ」が募り、2023年に日本山岳会に入会しました。会員諸氏との交流が広く、深くなるにつれ、活動山域が宮城県内から東北・北海道地区、さらには国内から海外にまで拡大していきました。また、夏山から冬山、厳冬期登山へと経験を積みつつあります。会員の皆様それぞれに「山への憧れ」があることと思います。この想いを大切に、環境や体制を整え、夢の実現をバックアップしたいと考えています。また、若い世代へ向け、日本山岳会の魅力を発信してまいります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

支部長が代りました

神奈川支部長 大槻利行さん

千葉県市川市の、山を望めない平野で生まれ育ちました。中学卒業前の1978年正月、初詣で奥多摩・御岳神社に出かけたのが「山」を意識したきっかけです。南房総・鋸山で遠足登山の経験はありましたが、冬空の下、神社参道から眺めた奥多摩の山々が、墨絵のように感じられたことをよく覚えています。

高校進学と同時にWV部に入部、

「寝ても覚めても山、山、山」で教科書より山岳雑誌が愛読書になりました。大学では北海道の十勝連峰や大雪山、九州の九重山へとWV部の行動範囲も広がり、スキーも始めました。卒業後は、夏は沢登り、冬は上越での雪洞作りや白馬主稜など雪域登攀へと登山形態も広がりました。若かったため「乱



神奈川支部長 大槻利行さん

読」ならぬ「乱登」とも言える力任せの登山でした。

97年にインド・カシミールのストック・カンリ（当時公称6153m）に登頂した後は仕事と家庭が中心となり、学生・独身時代より山行ペースは落ちましたが、「山」は常にそばにありました

中学時代の「あこがれ」は高校・大学時代で「生活の一部」になり、その後「遭難事故防止への関心」そして、現在は「心身の健康」と人生のステージで多くを山から教えるもらっています。

神奈川県は丹沢や箱根、三浦アルプスなど多くの登山ルートがありますが、1673mの丹沢・蛭ヶ岳が最高峰と中低山が中心です。生活拠点の街から山並みを眺められるのはうれしいことです。「前に山、後ろには海」と同時に楽しめるのも神奈川の山の特徴です。

「山のご縁」で集う支部会員は120名余になります。ともに汗を流し、自然と人生を味わうクラブライフを持ちたいと思います。

2016年の支部設立時より県内の山々を歩きました。今後は県外にもその範囲を広げ、活動していきたいと思っています。

静岡支部長 諏訪部 豊さん

私の登山事始めは、15歳時の白馬三山縦走です。以来55年間、ときには熱心に、ときには細々と登ってきました。本会へは2004年にピッケル収集の目的で入会しましたが、入会後その数がどっと増え、今では200本を超えています。

入会後しばらくは鳴りを潜めていたのですが次第に支部活動に参加するようになり、以来、山行委員長や事務局長を務めてきました。

静岡県は富士山や南アルプスをはじめ登山対象となる山に恵まれています。条件は良いのですが当支部も他支部同様に会員減が続ぎ、高齢化や他界による会員減が新入会員増を上回る状態が続いています。

ここ数年の新入会員の傾向は男性60歳前後、女性50歳前後です。仕事や子育てにひと区切り付き、登



静岡支部長 諏訪部 豊さん

山の良さが分かり始めた方々です。登りたい盛りのこの人たちに向けて楽しい計画を立て、同時にベテランたちにも喜んでもらえる山行を組んでいます。さらにここ数年、北・南・中央アルプス、八ヶ岳などのほかに遠隔地への山行も試みています。たとえば八甲田山系や白神山、佐渡島、熊野古道、九重連山などです。行き帰りの道中ではミニ観光も行ないます。こうして個人では行きにくい山行を継続して計画することで、支部の魅力を増していきたいと考えています。ただし、これらを継続するためには次代のリーダー育成が急務です。経験豊富な若手が入会してくれるのが理想ですが、それは高望みです。今いる会員に経験を積んでもらって次のリーダーとして育ってほしいところです。

また、山は登る対象だけではなく、文化的側面も多く有しています。特に豊富な書籍群は宝物です。登山史や自然など興味のある本から読み始めて広範な知識を得てほしいと思います。そして、それをほかの人にも伝えていってほしいのです。それが山の良さに気付いた者の責務でもあると思うのです。

REPORT

第79回ウエストン祭を開催

信濃支部 古幡開太郎

第79回ウエストン祭は6月1日、

英国人宣教師ウオルター・ウエストン師の勧めにより1905（明治38）年、日本山岳会が創立され今年で120年を迎えることを記念し開催されました。ウエストン師の母国、英国から駐日英国大使をお迎えすることでしたが、大阪万博など公用業務と重なって参加が叶わず、政治部二等書記官エミリー・メテンズ女史をお迎えして催されました。

を行ないました。

上高地バスターミナルに信濃支部員はじめ20名が集まり、出発式ののち徳本峠に向け出発しました。当日は松本市立安曇小中学校の児童・保護者・教職員60余名も徳本峠に向かいました。天気は曇りでしたが、足下に咲くニリンソウやサンカヨウなどの花々を楽しみながらの楽しい山行でした。

【碑前祭】

【徳本峠記念山行】
島々宿から徳本峠を越えて上高地へ入る島々谷（島々明神線歩道）は、台風や大雨で登山道が荒れ通行止めが続いていましたが、環境省・長野県・松本市などが改修を進め昨年、開通しました。今年は島々宿から徳本峠記念山行を計画しましたが、4月に二股から徳本峠間で土砂崩落が発生し、再び通行止めとなりました。やむなく上高地から明神を経て徳本峠往復に切り替え、5月31日（土）に記念山行

翌6月1日の碑前祭は小雨の中始まりましたが、式典途中に雨も上がり、青空が見えました。日本山岳会創立120周年を記念して英国大使館政治部二等書記官エミリー・メテンズ女史をお招きし、式典に華を添えていただきました。開式に先立ち東英樹・信濃支部長が、ウエストン師の日本における活動を紹介し、「坊がつる讃歌」の独唱で締めした後、安曇小学校6年生の河田紗知、上條愛彩さんのおふたりがウエストン師のレリーフへ献花、4・5・6年生16名が

「ウエストン祭の歌」を献じ、ウエストン師を称えました。

物語者に黙祷を献げた後、挨拶に立たれた日本山岳会橋本しをり会長は、ウエストン祭は登山の楽しさと日本アルプスの美しさを世界に広めたウエストン師の功績を後世に伝える意義深い文化事業であると語り、師の勧めにより創設され今年120周年を迎える日本山岳会は、師の精神を引き継ぎ、登山文化をさらに発展させるよう努めると挨拶されました。

ウエストン祭には、上高地を維持管理する機関と協賛団体の代表者ご来賓として参加され、代表して臥雲義尚・松本市長が挨拶されました。135年ほど前にウエストン師が日本アルプスの美しさに光を当てていただいたことから、昨年150万人を超える人々が上高地を訪れたと感謝し、上高地と北アルプスの自然と文化を次の世代に引き継いでいけるよう願っている、と挨拶されました。

次いでお招きしたエミリー・メテンズ二等書記官にご挨拶いただきました（通訳は定方もも氏）。英国と日本は400年前、ウィリアム・アダムス（三浦按針）が初めて



挨拶されるエミリー・メテンズ二等書記官

日本に来てから今日まで、深く豊かな歴史と共通の価値観を持ち、ともに多岐にわたる課題に取り組んでいます。昨年、天皇皇后両陛下が国賓としてチャールズ3世英国国王陛下からご招請を受けご来訪された折、国王陛下は「おふたりは、ほかに類を見ない友人同士だ」と語られました。また、ウエストン師が日本で経験した自然への深い愛情は日本で出会った人々に広がり、師の功績が今も上高地で称えられていることを嬉しく思います。師の想いと上高地、英国との友情がこれからも末永く続いていくことを願っています、と挨拶されました。

続いて日本山岳会信濃支部第2代支部長・尾崎喜八が第18回ウェストン祭（1964〈昭和39〉年6月7日）の朝詠んだ詩「ウェストン祭に」を北村静香・信濃支部会員が朗読しました。その声は、雨上がりの深い緑に囲まれたウェストン広場に木霊（こだま）しました。

この後、安曇小学校4・5・6年生児童たちが「カントリーロード」を歌い、参加者全員で「エーデルワイスの歌」「雪山讃歌」を合唱して式典を閉じました。

【記念講演】

記念講演に先立ち、信濃支部山行リーダー・高橋湧太会員が前日



碑前祭参加者全員で記念写真に収まる

の徳本峠記念山行について報告しました。徳本峠からの眺望は得られませんでした。途中、明神岳や西穂高岳が雲間に見え、全員無事下山した、との報告でした。

記念講演は、集まった200名余を前に坂井広志会員（引き継がれる山岳祭）プロジェクト・リーダー、日本山岳会前副会長がウェストン師と日本山岳会で行なわれている山岳祭について講演されました。

まず天皇皇后両陛下が国賓として英国に招かれた折、バックingham宮殿での晩餐会で、チャールズ3世国王陛下が、ウェストン師が日本で登山を広める手助けをしたことに触れられ、「山登りを愛する気持ちは、今や多くの英国人と日本人が共通していて、陛下と私も同じですね!」とスピーチされたことを話され、天皇陛下も日本山岳会会員であるので、本会にとっても大変嬉しいニュースだった、と紹介しました。

次いで有史以前から今日までの日本人の山との関わり合いの歴史、日本山岳会創立メンバー・武田久吉の父である英国駐日公使館二等書記官アーネスト・サトウが18

81（明治14）年、外国人向けガイドブック『中部および北部日本旅行案内』を出版したことや、ウィリアム・ガウランドなど数多くの英人が日本で活躍され、産業・文化の発展に尽くされたことを話されました。

日本山岳会が今年創立120年を迎えるに当たり、ウェストン師をはじめ本会が関わる11人の顕彰人物と、各地で行なわれている14の代表的山岳祭を採り上げ、関係する各支部とともに話されました。

列記すると、ウェストン師と「ウェストン祭」（信濃支部）。小島鳥水と「小島鳥水祭」（四国支部）。岡野金次郎と「岡野金次郎碑前祭」（神奈川支部）。高頭仁兵衛と「高頭祭」（越後支部）。木暮理太郎と「木暮祭」（山梨支部）。田部重治と「田部祭」（山梨支部）。横有恒と「横有恒碑前祭」（北九州支部）。藤木九三と「藤木祭」（関西支部）。深田久弥と「深田祭」（山梨支部）。「久弥祭」（石川支部）。播隆上人と「播隆祭」（富山支部）。泰澄大師と「泰澄祭」（福井支部）。

これら山岳祭を通して120年の歴史を見ると、ここに至るまでの先人の努力と見えざる絆がある。

世界各地では今も戦争・紛争が起きているが、今日ウェストン祭を祝えるのは平和の証であり、平和が継続されることを願う、と結ばれました。

記念講演が終わるころには雨は上がり、来年の再会を誓い、碑前祭を閉じました。

【ウェストンが愛した上高地展】

日本山岳会が今年創立120周年を迎えることを記念し、ウェストン師を改めて知ってもらうため、上高地インフォメーションセンターで「ウェストンが愛した上高地」展を開催しました。ウェストンがこよなく愛した上高地の歴史と自然、ウェストンと親交を重ねた上條嘉門次の写真と資料60余点を掲示するとともに、ウェストン祭で頒布された記念手拭い60余枚、記念ブローチ60余点を展示しました。開催期間（4月24日～6月8日）中の入場者数は5839人、入館者6万5919人のうち8・9%の方に鑑賞していただきました。

ご協力いただいた自然公園財団上高地支部と安曇野山岳美術館に感謝申し上げます。

（ウェストン祭実行委員長）

追

OBITUARY

悼



高遠宏さんと私

児玉茂

よく参加されたようだ。いつもにこやかなお顔で、安心してお話できる先輩だった。

私が日本山岳会に入会したのは、ルームが向井ビルにあった時代の1975年だった。推薦人の1人が高遠宏総務担当理事で、もう1人は山岳部の先輩。入会の理由はカラコラム登山に行くために日山協の推薦を得るためであったが、入会するとすぐに神崎忠男さんが担当する集会委員会に引き込まれ、イベントの企画や山行の計画を作った。高遠さんご自身も、ご家族を伴って山行や餅つき大会などに

私は学生のときから山の資料を調べるため図書室にはよく通っており、湯島のルームから現在の四番町のルームに移った後の図書室が、いつまでたっても蔵書が整理されずに使いにくい状態にあることも見ていた。司書兼事務員を務めていた高橋美津江さんが退職される86年に、私は図書室の整理、管理を行なうために本部の事務員になった。このときも高遠さんは総務担当理事として会務に関わって

おられた。最初に手を付けたのは書庫内に置かれている登山隊の膨大な資料類や積み上がった会報「山」のバックナンバーだった。これは総務として処理できるので、高遠さんにご協力いただいた。次に果たすべきは、紐掛けされた外国雑誌の数年分を超えるバックナンバー、そして、未整理状態で積まれた図書交換会の残本に「山崎文庫」の山だつた。しかし、これらは図書委員会の管轄なので図書委員会に整理を申し入れた。

ところが、図書室の作業を行なっていたアルバイトの学生司書が音を上げて辞めてしまったので、いよいよ図書委員自身が作業を行なわざるを得ない状況に至った。結局それを行なう委員が誰もおらず、高遠さんと常務理事の松田雄一さんに協力を仰いで図書管理委員会を設けることを提案し、理事会で承認されたといういきさつがあった。

高遠さんは長らく『山岳』編集委員でもあったが、99年から担当理事になられた。私もこの年から2002年まで海外登山を担当する委員になった。この間に国際山岳

年があり、環境問題に特に関心の高い高遠さんは『山岳』にその特集を組むことになった。

その後も引き続き『山岳』編集委員に加わっており、今度は2005年の日本山岳会創立100周年のための実務資料の収集などに協力された。この場でも私は『日本山岳会百年史』の作業に加わっていたので、高遠さんと意見交換する機会が多くあった。私が編集を担当した『山岳』第102年は、『日本山岳会百年史』に載せきれなかった資料を集めた号となったが、その中に「日本山岳会の財務状況の推移」があり、これは高遠さんと松田さんがまとめられた貴重な資料である。

思い返せばいろいろな場で高遠さんのご協力を得ていたことになる。私との関係は50年に及んでいたが、創立100周年のころから数えてもすでに20年が経ち、お互いにルームを訪れる機会がなくなっていた。年賀状の届かなかつた今年1月に、娘さんから高遠さんが89歳で亡くなられたという知らせが届いた。謹んでご冥福をお祈りするばかりである。



高遠 宏(たかとう・ひろし)

会員番号5532 永年会員

1935年 東京都文京区に生まれる
1958年 玉川大学農学部農学科(土壌学専攻)を卒業
1962年 東京大学農学部研究生修了。以後、岡山県や茨城県の技術吏員を勤めたのち、日本肥糧株式会社、民間会社や団体、研究所などに勤務
1963年 日本山岳会に入会
1974~78年、83~86年、99~2002年 日本山岳会理事に就任
1990~2003年 国際協力事業団の専門家・調査団として海外各国に派遣される
2024年12月22日 逝去、享年89

辺さんの逝去を悼む

大森弘一郎

辺さんのご自慢の本『二人者』、そのPartⅡのスケッチ集を葬儀場で貰いました。「登りたい心で描いた絵」の展示会は7回あったのですが、その中から選んだこの本を見ると、辺さんの山に憧れ続けた気持ちがよく分かるのです。

あるとき何かの会の後、ふたりだけだったエレベータの前で、いきなり『ごめん』とひと言。びっくりして「えっ、なんですか?」「ああ、やつと言えた」と。それで私はなんのことか分かって驚いたのです、なん十年間も気にしておられたのか、と。

ヒマルチュリの初登頂を終えてC5へ帰って来た辺さんに、「明日ウエスト・ピークに登ろう」とねだったのですが、辺さんは「もう



田辺 寿(たなべ・ひさし)

会員番号4618 永年会員

1931年 東京都青梅市に生まれる
1950年 慶應義塾大学法学部入学後
経済学部へ。山岳部に入部
1956年 慶應義塾大学卒業、三越入
社
1958年 日本山岳会に入会
1959年 日本山岳会ヒマルチュリ登
山隊に参加
1960年 慶應義塾ヒマルチュリ登山
隊に参加し、同峰初登頂
1961～64年 および95～98年 日本山
岳会理事に就任
1969年 日本山岳会エベレスト南壁
偵察隊に参加
2005～06年 日本山岳会副会長に
2025年3月14日 逝去

登頂したんだからいい」と言う。撤収の日の午前中、中沢さんとノーマル・ルートでなく直登を選び、途中のクレパスが越えられなくて登れなかったということがあります。このことは私をさらにヒマラヤに近づけることになったのですが、辺さんはそのことを言っていたのです。このひと言は、じわりと私の心に沁み込んでいます。私は、辺さんが行く山について行くのが常でした、辺さんは人に惚れ込み、人に惚れられる人でありました。私も辺さんあって山好きが深くなったのでしょうか。

辺さんこと田邊 壽先輩は立川二中で山に取りつかれ、山岳部を創って「燕から槍、穂高、上高地」の縦走をするなど活躍します。その後、慶應義塾大学に入り、宮下秀樹さんに出会います。チーフリーダーのときに北穂東壁で部員の

滑落事故があり、この遭難前後の出来事が辺さんをさらに変えたのではないのでしょうか。

山においては宮下さん、仕事においては三越の岡田社長、ダイエーの中内社長と濃厚な関係を持たれたようです。このことは『二人者』に詳しく書いてあります。辺さんは山登りと社会人の生活を同時に十分堪能し、それぞれで成果を挙げたと満足して逝かれただろうと思います。

亡くなる少し前に拝島のお宅にお伺いしたとき、「窓の真正面に丹沢が見えるんだ。毎朝、加藤たちを拝んでいるよ」とおっしゃったので、心の中をえぐり過ぎたかと思つたものです。そのとき置いてあつた絵を写して絵はがきを作つてあげたところ、「俺はこんなに下手じゃねえ」とボツになりました。画の心を私が汲み取つていなかったと気付いたのです。

日本山岳会においては、1959年にヒマルチュリ遠征隊に選ばれて参加しましたが、東尾根最後の氷壁が突破できず撤退。翌60年に慶應義塾創立100周年記念登山隊として初登頂に成功します。さらに69年にエベレスト南壁偵察

隊に副隊長で参加。このとき私も壁の地形模型を作り、空撮で立体図を作つて登攀の役に立てようと頑張りましたが、辺さんは、その南壁に行つて低酸素にやられた、と悔しがっていました。

私も辺さんに惚れたひとりであり、自分もかくありたいと思う先輩でした。冬の合宿でのスキーレースに勝つた私をすごく喜んでくれたり、5月の早月尾根から平蔵谷を転げ降り、雄山谷を降つて針ノ木岳に行くという、すばらしい経験もさせてもらいました。

いつ膝に激痛が起こるようになってたのでしょう。思い切つて手術したものの結果は希望どおりにならず、それでか熱心に画業に打ち込んだのでしょうか。山への想いを満たすために……。

「登りたい気持ちで描いた」と書いてあるごとく、画に表われた山への心は、「登れなくなつて」から深くなつていたと分かります。辺さんは亡くなる直前まで「山」を想つていたのでしょう。日本山岳会は、辺さんの「山」を中心にした心を活かしてくれました。このことについて、故人に代つて深くお礼申し上げます。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(45)『エベレスト・ママさん』(田部井淳子著・山と溪谷社)

井上優美

今から50年前の1975年5月16日12時35分、エベレスト日本女子登山隊の副隊長・田部井淳子は、女性として初めて世界最高峰の頂上に立った。歴史的快挙の瞬間であった。

本書は、そんな著者がエベレスト登頂に至るまでの半生を描いた初めての著作。女性ならではの葛藤を含め率直な文章で綴られ、女性だけの遠征隊の当時を知る貴重な記録であると同時に、その後も山登り人生を貫いたひとりの女性の生き方の原点が描かれている。

著者は39年、福島県三春町生まれ。10歳のときに登った那須山で



昭和53 (1978) 年初版発行

の感動が山登りの原点。大学を卒業後、社会人山岳会に入会し岩登りに熱中した。人との出会いに恵まれて着実に力をつけ、結婚後も山への夢を追い続けた。

60年代の日本は高度経済成長期を迎え、56年にマナスル初登頂を成し遂げたのちの第2次登山ブームの只中にあつた。著者らは69年「女子だけで海外遠征を」を合言葉に女子登攀クラブを設立。70年にアンナプルナⅢ峰登頂。71年3月に目標をエベレストに設定以降、74年末の出発に至るまで準備期間は1400日間に及んだ。

初めてのエベレスト女子登山隊だけに、人と資金集めは難航した。予算を限りなく削り、節約を重ねた貧乏隊であつた。隊員探して女性に声を掛けると「ヒマラヤならぜひ行ってみたい。でも、技術もお金もない」と返事に必ず「でも」が付いた。長女を出産し、乳児を

抱えながらの準備期間であつた。集会に出るために台所の鍋を総動員して保存食を作り、オムツをセツトし、子どもの体調を崩さぬよう心遣いをする。

長い準備期間を耐えられたのは、本当にやろうとする意志があつたからこそであり、「意志こそ力」と語る。夢に向けたたゆまぬ努力と強い意志、周囲からの協力を得てエベレスト登頂への困難な道のりを切り開いた。

私が初めてこの本を読んだときは、頂上へ向かう隊員の姿に胸苦しさを覚えながら、初登頂記として読んだことを覚えている。再認識したのは、自分自身が結婚し出産した後に再読したとき。このとき初めて、田部井さんがエベレスト登頂時に3歳の女の子を持つ母親だったことの意味に気づいたのだった。3歳までの子どもがいれば夜はもとにも寝られず、自分のペースで生活することはままならない。「意志こそ力」という言葉の背後にある苦労の数々と悔し涙の一端を想像することができた。

最大の理解者であり支援者であつた夫・政伸さんとの絆も印象深い。「お互いに自分の好きなこと

が存分にできるように」と結婚し、世間の物差しではなく自分たちの物差しで考え、妻を「行つてこい」と送り出す。こんな夫婦のあり方もあるのかと新鮮な驚きだった。

「夫や子供のために捨身になるのもひとつの生き方であろうが、普通の生活を続けた上で、さらに捨身になって考えられるものを持つ。そんな生き方をしたい。」

生涯山を愛し、エベレスト以降も高峰登山を続け、2016年に亡くなるまでに登頂した世界各国の最高峰は76ヶ国に及ぶ。女性は家庭を守ることが役割とされた時代に、普通の生活をしつつ自分自身のために山登りをしたいと宣言し、その人生を貫いた。登頂から50年経った現在においても、彼女のエネルギーで前向きな生き方に勇気をもらう人は多いだろう。

本書は78年に『エベレスト・ママさん 山登り半生記』と題して山と溪谷社から発刊後、2000年に「Yama-ka-i classics」に収録。現在はこの本を底本とし『タベイさん、頂上だよ』に改題して2012年に出版されたヤマケイ文庫(税込968円)で読むことができる。

(図書委員会委員)

『ネパール王国探検記』

（川喜田二郎著・光文社）

根深 誠

1953年、我が国のマナスル登山隊に著者は科学班の一員として参加した。科学班がたどった経路は、ヒマラヤの主脈を分断して流れるカリ・ガンダキとブリ・ガンダキというネパール屈指の二大峡谷である。この峡谷を右回りにたどって、アンナプルナ山群とマナスル山群を一周した。途中、ブリ・ガンダキ支流にあるシアル・コーラの集落に滞在し、文化人類学者としての実地調査を行なっている。

奇しくも同年、エベレストが英国隊によって陥落する。道中立ち寄ったマナスルのベースキャンプでこの知らせに接した著者は「失望落胆やる方なし。私はこの晩をけつして忘れないだろう」と本書に記している。誰もが憧れたであ



昭和32 (1957) 年初版発行

ろう世界最高峰エベレストである。その初登頂は、まさに輝かしい歴史的偉業として世界を瞠目させた。

しかし、残念にも53年のマナスル登山は失敗した。その後、捲土重来を期し56年に成功する。片や科学班に参加した著者は、その成果として本書を発表し、大いに好評を博した。そればかりでなく、著者の志はさらに発展し、のちに「鳥葬の国」を著わし、そして、KJ法や発想法を創造し、移動大学や問題解決学、さらには地域開発などの実践活動へとつながっていく。そのやり遂げた膨大な仕事の量を考えれば、著者はまさに「知の巨人」と言えようか。本書には、そうした著者の若き日の鼓動が存分に脈打ち、文脈や行間から読者に伝わってくる。

文庫版の「あとがき」で、著者はこう述べている。

《あまりにも多くの空論が、現場を離れたところで回転している。そして現場を離れたところで物事を決める権力が、生き生きとした現場を去勢し解体してゆくのであ

る。》

言い得て妙である。ここに見られる洞察力こそ著者の神髄ではないか、と私は思う。

私は著者の知遇を得て以来、影響を相当に受けたひとりとして様々な実践活動に関わってきた。私の郷里にネパール人を滞在させてリング栽培や加工の研修を行なったり、ネパール政府森林官による白神山地ブナ林視察、郷里での著者の講演会、D・スネルグローヴの著作『ヒマラヤ巡礼』に同行したパサン・カンバチェ・シエルパを招いてのリング園や白神山地のブナ林視察、ほかにもツアルカ村での鉄橋建設、各家庭の家系図作成、さらに河口慧海のチベット潜入経路の踏査などがある。

慧海のチベット潜入経路の踏査については、当時、ネパールは王国であり、トルボ地方の入域が外国人に禁じられていた。92年、私が特別に入域できたのは、著者が国王を介してネパール政府に働き掛けたことによる。その後、トルボ地方は有料で外国人に開放されるようになった。

著者の没後、顕彰碑建立の相談を私は喜美子夫人から受けたこと

がある。にもかかわらず、いまだ実現していない。ただし、建立場所はムクチナート、もしくはジャルコットを予定している。碑文は日本語とネパール語と英語で記す。碑面には以下の詩句を刻む。

《憧れは峠のむこう遙かにも透暮トルボの空がここから見える》

西方、カリ・ガンダキをへだてて幾重にも連なる山並みを縫うように、道がひと筋延びているのだ。本書の舞台から「鳥葬の国」トルボ地方へと続く道である。本書でも紹介されている河口慧海が、その昔たどった経路であり五千数百mの峠を越さねばならない。

なお、詩句にある「透暮」とは著者の号である。著者はトルボ地方にほぼ愛着があったと思われる。現在、この道は車道と化しつつある。かつて何日もかけて歩いた行程を歩かずして、ものの何時間かで行けるのである。私は今まで9回トルボ地方に出かけたけれど、その後の変わりようを見届けるためにも、今一度行ってみようものである。

文庫版は講談社文庫（1976年初版発行）に収録されている。（紀行作家・明治大学山岳部OB）

REPORT

ジョージア・メスティアで
コーカサスの桜植樹祭を挙る

吉川正幸

ジョージアの黒海沿岸の村から深い溪谷の断崖の道を遡ること3時間、急に谷が開けると白銀のコーカサス山脈を背景に、高い塔の立ち並ぶメスティアの町が現われた。明るい谷に広がる町の周囲は新緑が美しく、秘密の桃源郷のようだ。2025年5月、10人の仲間とメスティアを再訪した。3年越しの計画で、ついにこの町に日本の桜を植えることができると思うと、胸が高鳴る思いであった。メスティアに桜を植えることに



塔が林立する世界遺産登録のメスティアの町

なつた縁は、思えば私が1971年夏にカズベク峰(5047m)登山に訪れたときから始まっていた。2019年夏に、再びジョージアを訪れた旅の思いを『山岳』2020年に「コーカサス・半世紀ぶりの再訪記」として寄稿した。その文章を読まれた在ジョージア日本大使から、22年春に、メスティア市がコーカサスの無名峰に「日本」という名を与える計画があるので、日本山岳会に協力してほしいと伝えられた。そこから紆余曲折があり、メスティア市と合意して日本の桜を植樹しようとする計画が始まった。

24年3月には、植栽地の調査と苗木の移送のために3名でメスティアを訪問し、準備を進めた。桜の苗木は、冬にはマイナス15度にもなる厳しい環境に適応できる、弘前の大山桜など10本の苗を選び、植物検疫を受けてジョージアに空輸した。首都トビリシの国立植物園で1年間育ててもらった後、直

前にメスティアに移送した。標高1400mの山地での桜の開花を確実にするために、苗木の植栽地を市中の3ヶ所に分散することを決めた。

5月28日、植樹の前日の夕刻、メスティア市は我々のために歓迎レセプションを開催してくれた。この会には主催者のメスティア市長と議長のほか、ジョージア・リゾート開発庁長官(昨年7月に日本山岳会を訪問)、登山家など地元の方々、私たち10名に加え、在ジョージア日本大使代理、JICA支所長、青年海外協力隊員の方なども参加した。

翌29日には、コーカサスの高峰を望むメスティア市内の3ヶ所の公園などで、桜の苗木の植樹を行なった。最後のメスティアで一番大きな公園では、植樹祭のセレモニーも行なわれた。メスティア市長ほか前日の歓迎会の参加者に加え、地元小学校の子どもたち30名余りも参加、大勢で楽しく桜の苗木を植えることができた。

メスティア市が準備した日本山岳会の名の入った「SAKURA」の立派な銘板を前にして、明るい日の光の中で植樹の後、皆で「さく

ら、さくら」の合唱を行なった。私たちだけでなく、メスティアの子どもたちにも、きつと記憶に残る植樹だったと思う。

植樹は、私たちだけでなくメスティア市やジョージア国立植物園、現地の青年海外協力隊員の協力によつて成功することができた。桜の植樹はまず第一歩。これから開花を見届けるまで、メスティア市への訪問やジョージアとの人と文化の交流を続けていきたい。これを機に、日本山岳会から登攀が難しいウシバ峰(4710m)に挑む若者が出ることも期待したい。



植樹祭参加者たちと桜の周りで記念撮影

東西南北

登頂記念画集『日本三百名山紀行』を上梓 渡邊嘉也

アルパインスケッチクラブは平成2年9月の集會委員会の上高地スケッチ山行で生まれ、同好会として35年が経つが、今もクラブライフを楽しんでいる。毎年、有楽町の東京交通会館で「山好きの山の絵展」を開催し、多くの山岳愛好家を迎えている。

絵の前でジッと見ておられる方々から「私はこの山にはたくさん思い出があるので」とか「いつの日か行ってみたい山なので」、「私は百名山を目指しているので」、「私の故郷の山なので」など、それぞれの山への想いを語ってくれる。こんな言葉を聞くと絵を描いて良かったなあ、と嬉しくなる。

年1回の絵展には1人当たり1枚から2枚の出版ができる。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

出版できなかった絵の多くはお蔵入りとなり、やがて処分されるのでは「絵が可哀そうだ。せめて、それらの絵を本にして残そう」との思いで本誌を編纂してきた。

作家・原山恵津子氏の山の絵の最初の一筆は、昭和37年の戸隠山だ。以来、平成14年に日本山岳会に入会し、アルパインスケッチクラブに所属してからは「絵を描くことをモットーに登山をした」作品まで、六十有余年の間に描いた三百名山の絵である。

小学校の集団登山で山が好きになった彼女は、山岳部のなかった高校で山岳部を創設し、社会人になつてからは就職先の「長野電鉄山岳部」や「信濃山の会」で岩登りや冬山登山に必要な技術を習得し、天気図など実践的な技術や知識を得た。

本書は山と花の二部で編集し、それぞれ目次を付して山名、花名

などの検索が容易にできる。絵は水性と油性の色鉛筆で描いている。山名ごとに記されている登頂日や行程などは、登山時に携帯していた「山日記」（日本山岳会発行）から。山行の時期は笈ヶ岳や毛勝山などは無雪期の登山が難しいので積雪期に。花の美しい山はその季節に合わせて登られている。また、岩登りをしてこそ見える、臨場感あふれる山の姿も描いている。絵は、北の利尻山から南の宮之浦岳へ、花は科目別アイウエオ順、花の色は黄色、赤色、青色順で掲載、花名には名前の由来を偲ばせる漢字名も付記した。

紀行文では越後駒ヶ岳の下山時に「連れが木につかまって下り、手を離すと蛇がバラバラと落ちると……」や西穂から槍ヶ岳への長い縦走を「本当に楽しく最高の縦走」など、心底山や岩登りが好きな方

登頂記念画集
日本三百名山紀行



A4判/190P
全カラー3000円(税込み)
画・文 原山恵津子
編集 渡邊嘉也
Mail: ysi-wtnb@mba.ocn.ne.jp

「会員優待サービス」変更のお知らせ

〈会員サービスWG〉

*「那須・奥鬼怒・日光・尾瀬」原の小屋 経営者が変わりましたので、一覧表から削除します。

新規加盟*「同右」麓の山小屋 なかむら 〒325-1030 栃木県那須郡那須町湯本667-16 ☎0287-7415844 日本山岳会会員優先予約、冷蔵庫内ドリンク・プレゼント

の記述だなあとと思う。この本をクラブの先達である斎藤幹雄氏は、「僕にはスケッチクラブの鏡のように光って見えます」と称していただいた。

〔アルパインスケッチクラブ会員〕

板殿正太郎の新たな

写真(下)

牛丸工

〈前号で、板殿の写真はポストカードであったことが判明〉

差出面には大きくデザイン文字で「POST CARD」と、ゴシック体の大文字で、そして小さな字で

“CORRESPONDENCE ADDRESS”と一応絵葉書の体裁をしているが、切手を貼る場所が印刷されておらず、住所の下にある線がないので絵葉書でもない。さらにこの写真の実物大のカラーコピーまで郵送で送ってきてくれた。

このポストカードのサイズは縦13・5 cm、横8・5 cmで、大正から昭和の初めころの官製ハガキのサイズと照らし合わせてみると縦・横いずれも5 mm短く、葉書として流通可能な規格品でないことが理解できる。となると、この板殿正太郎の写真は明らかに絵葉書として製作されたものではなく、あくまでも“ポストカード”として、有償無償で配られたものであることが理解できる。ただし、明らかにすることは一つだけある。それは板殿は昭和3(1928)年12月11日に64歳で逝去しているのに、明らかにそれ以前の撮影であることは間違いない。

乗鞍の住人との会談でいくつかの収穫があった。いくつかの知りたかった写真がどここの家にある、ということが分かったことと、最大の収穫は板殿正太郎であった。「板殿」の発音を自分なりに「イ

タドノ」と振り仮名を付けてはいしたが、地元では「イタンド」と呼んでいたのには驚いた。また、いくつものイタンドの写真が書籍に隠されていたことを確認させられた。

松本市には旧陸軍歩兵第五十連隊があり、大正6年7月に乗鞍岳・槍ヶ岳方面に3班に分かれ、山岳歩行訓練が実施された。その記録が『信飛国境山岳強行軍記念帖』として松本市内の小松兵林堂から翌8月に出版されている。国会図書館のデジタルで閲覧可能であり、以前、閲覧したことがあった。今回この貴重な本を所蔵している人がいて、持参してくれたので拝見させてもらった。なんとその中の3枚の写真に板殿正太郎が写っているのであった。

1枚は中野写真師撮影で「乗鞍仙人板殿正太郎」と説明書きがされている。2枚はガラス乾板での撮影のため板殿が動いたらしく、少しかすんでいるように見えるので、見落としていたのだった。撮影日はいずれも7月28日である。板殿の生家に遺された1枚の写真ではキセルを口にくわえているが、ここでもキセルをふかしている姿が写っている。また、大久保家の

写真と比べると顎髭が黒いのが分かるので、大久保家のポストカードは『信飛国境山岳強行軍記念帖』が撮影された、もう少し後のような気がする。

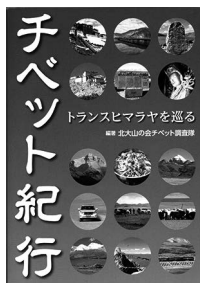
【参考…官製ハガキの規格サイズ】

昭和41年〜現行規定 14・0〜15・4 cm×9・0〜10・7 cm 昭和8
25年 14・0 cm×9・0 cm 昭
和4〜5年 14・1 cm×9・0 cm
大正8年 14・2 cm×9・0 cm



北大山の会チベット調査隊編著

チベット紀行



2025年2月
発行:いりす/発売:同時代社
A5判 242頁
3500円+税

チベット高原に憧憬の念を抱く人は少なからずいるだろう。ヒマラヤ氷雪嶺の北方に茫洋として波打ち連なる茶褐色の大地である。とりわけ、ヒマラヤに関わったことのある古い年代の山好きには、その想いが強いと思われる。ヒマラヤの氷雪嶺から眺め渡すと、そ

こには大空と大地が接する広大無辺な風景が広がっていて、どんな所だろうか、いつか行ってみたいという欲求に駆られる。

「1960〜70年代にヒマラヤ山脈南麓を旅した人々にとって、当時、竹のカーテンでしつかり閉じられていたヒマラヤ山脈背後のチベット高原を訪れることは憧憬ともしえる想いであった」本書のこの一文からも察せられるように、チベットは久しく共産中国の支配下にあつて封じ込められてきただけに、現在なお規制が多くてなかなか簡単には歩き回ることのできない場所である。加えて、標高が

高くて酸素濃度が希薄な土地柄ゆえ高所順応なしでは危険が伴い、行動もままならない。

本書に記されてあるように調査旅行の起点となる、チベットの聖都ラサの高度が3658m。富士山に近い高さだが、調査隊の測定

2025年自然保護全国集会のお知らせ

自然保護委員会

● 自然保護委員会では10月18日、19日に「新潟の山々の自然とライチョウ保全活動」に関するシンポジウムを越後支部と共催で開催します。ぜひご参加ください（日本山岳会自然保護委員会60周年、妙高市制施行20周年、妙高戸隠連山国立公園指定10周年記念）。

● 18日(土) 講演会(13時～17時) 基調講演 第1部「火打山のライチョウ」小林篤氏 第2部「新潟県の山と自然」萩原浩司氏。支部報告についてはポスター展示。

会場 妙高高原メッセ(新潟県妙高市田口33) 申込み 左のQRコードよりお願いします。



した地点ではここが最も低い。高い地点だと5000mを超えている。高度障害に注意を要する。7名のメンバーから構成された13日間の調査旅行は、ラサを起点にチベット高原を右回りに周回するコースであり、想像するだけでもそ

● 19日(日) フィールドスタディ (笹ヶ峰夢見平遊歩道を越後支部の方々が案内します)。集合 9時30分、笹ヶ峰乙見湖 休憩舎駐車場集合、13時30分ごろ解散予定。

持ち物 行動食、飲料、昼食、雨具などハイキングに相応しい装備でご参加ください。＊雨天の場合は妙高ビジターセンター周辺を散策の予定。フィールドスタディ問合せ・申込み 春日良樹torbeljo@joetsu.ne.jp

会員番号・氏名・住所・生年月日・メールアドレス・電話番号を記載してお申込みください。＊参加費はいずれも無料ですが、先着順です。お早めにお申込みください。なお、宿泊は個人で手配をお願いします。問合せは自然保護委員会・黒沼へ。

hk17044@jacmember.com

の魅力に惹き付けられる。ちなみに、本書の凡例に見られるように、調査旅行は2015年に実施されている。

内容を紹介すれば、第1編が旅行記「チベット周回の旅」、第2編が探検登山に関わる歴史「チベットの探検と登山」、第3編がハイウェイの道路事情「チベットの『今』」、そして、第4編が「チベットを科学する」と題して地形や地質、気象など自然概要について、紙質を替えてカラー写真や図解入りの特別仕立てで解説している。このことからして、第4編が本書のハイライトのように思われる。

本書の執筆には、調査メンバーのほかに4名が携わり、内容を幅広く濃いものになっている。執筆者は各人、その道に造詣の深いエキスパートである。この点が通常の旅行記とは異なる本書の特色にもなっている。ほかにも気の利いたコラムが各所に配置され、読者が利用しやすいようにきめ細かく工夫が凝らされている。チベット高原を旅行する際の、便利な必携の書と言えるかもしれない。

チベット高原では山や峠、河や草原、そして湖、岩石砂漠地帯が、

私たちの普段の感覚をはるかに上回る鮮度で圧倒的な迫力を見せて開ける。各種野生鳥獣も生息し、訪れるべき仏教寺院も数多い。現在では各地に宿泊施設も完備し、ハイウェイを利用して旅行が手短に愉しめるようになっていく。

そして、その旅行に知的な味付けをして、旅行を味わい深く有意義なものにするために本書が役立つのではないだろうか。

なお、本書をお求めの方は左記の浜名純氏(北大山の会会員)に連絡を。頒価30000円(税込み)

✉ jhamana@com.home.ne.jp
090-6005-7887

(根深 誠)

千の風になって 神尾重則遺稿集

神尾重則著



2024年8月
山と溪谷社 560円
四六判 3000円+税

著者の神尾重則氏は日の出ヶ丘病院の院長であり、特にがんの早期発見に努め地域医療に尽力され

「山岳会のヒトとモノ」講座 第4回 「カンチエンジュンガ縦走」開催のお知らせ

今回のテーマは、「カンチエンジュンガ縦走」です。

ナンダ・デヴィに続けて、今回は、映像と写真、トークで「カンチ縦走」を振り返ります。ヤ

ルン氷河にBC、7200m地点にABCを設営、縦走隊は南峰、中央峰に縦走、主峰、中央

峰、南峰に日ネ各隊員が登頂し、ハンググライダーもC4からBCまで飛行に成功しまし

た。8500mの南峰、中央峰縦走と主峰登頂という成果に加

え、大きな事故もなく、若手メンバーを育成したことも注

目されます。また、彼らの成長のちの1988年の3国合同

同チョモランマ交差縦走へとつながりました。今回も、でき

れば何人かの縦走隊員に集まっていただき、当時の思いを語

ってもらおうと思います。

日時・2025年9月1日(月)

18時30分～20時30分
場所・日本山岳会ルーム104室およびリモート開催
方法・104室で対面の講演会を行ない、併せてリモート(Zoom)で配信する。
講師(ナビゲーター)・谷山宏典

氏(ライター、日本山岳会、古野淳氏(前日本山岳会会長)、協力者・鹿野勝彦氏(カンチエンジュンガ縦走隊長)

参加方法・事前の申込みは行ないません。以下のどちらかでご参加ください。

①会場での聴講希望の方・日本山岳会ルーム104室に直接お越しください。18時から受付を開始します。

なお、先着順で定員は35名までです。

②リモート参加希望の方・8月25日(月)から山岳会ホームページ上でZoomのURLを公開します。各自のPCなどで入室してください。18時から入室できるようにします。

問合せ・資料映像委員会(飯田) ☎090・4683・2305 記念事業委員会エ

ベレストPJ(神長) ☎090・4124・1082

主催・公益社団法人日本山岳会 資料映像委員会・記念事業委員会エベレストPJ

てこられた。多くのがん患者を診てこられた方だが、そのご本人が脾臓がんを発病されたのである。多忙な中であつて、地元紙や医療専門誌などに多くの文章を書かれてきた。本書はそれらも収録し、がんの治療を始めてから書かれた文章と、章の間にはご家族の文章も加え、500ページを超える遺稿集として構成されている。

登山では、ネパールのツクチェ・ピークに南西稜から初登頂している。のちにエベレスト街道のペリチェ診療所での診療活動を行ない、さらにガッシャブルム遠征隊のドクターとして参加し、その縁で、EWS (Earth Works Society) というNPO法人によるヒマラヤの、ドルポという標高4000mを超える地域のティンギュー村で教育支援や医療の活動に当たつてこられた(神尾氏の経歴などについては、追悼文とともに会報「山」906号、『山岳』2021年に詳しいので参照されたい)。

第一章「異形の山(絶筆)」は、がんと診断されてからの思いを登攀に例えて表現したもので、絶筆であり、いくつもの難関を切り抜けていく展開が切々と胸に響く。お

そらく第五章「がんの考察」を書く中で、この「異形の山」としてまとめたと考えられるが、自分の病状を分析し、どう対処するか判断する医師としての冷静さの一方で、不安な思いが去来する心の様相も垣間見える。

第五章では忍び寄る死も意識されていたと思われるが、死生観に関して先人のことば、詩歌など、幅広い知識からの考えが述べられている。第六章は日記風の「脾臓がん闘病記」だが、今となつては、ご家族と一緒に過ごす時間を大切にされていた方なのだな、と思う。そうした折々に俳句や短歌も詠み続けてきた第七章「俳句と短歌」。

第四章「アンチエイジング」は西多摩新聞連載の「アンチエイジングのための健康学」からの抜粋であるが、一般読者を対象としており、分かりやすく、私たちにとつてもためになるものばかりである。第三章は主に「地平線通信」に寄稿されたエッセイ。第二章「憧憬のドルポ」の中に、タイトルの鎮魂歌「千の風になつて」についてこう書かれている。「故人は今もなお旅を続けている。運ばれる風の中に含まれる命を生きている。あの世

「全国ボランティア支援登山集会」ご案内

東海支部

今秋、公益活動の社会貢献事業の一つとして、ボランティア支援登山の普及を目指し、下記のとおり各支部の皆様との情報交換会と視覚障がい者登山の体験登山を開催いたします。各支部事務局宛にご案内をお送りしていますが、個人参加も大歓迎です。ご興味のある方は下記東海支部ボランティア委員会までご連絡ください。

●視覚障がい者登山《愛知県・猿投山(629m)》プログラム

期日 11月15日(土)・16日(日)

場所 情報交換会＝OMCビル講堂(東海支部ルームと同じビル) 名古屋市中区富士見町8-8

日程 1日目: 全国ボランティア支援登山集会 *13時30分受付 *14時～17時30分 情報交換会(各支部からの報告とパネルディスカッション) *18時30分～20時30分 懇親会

2日目: 猿投山視覚障がい者登山 体験登山 *9時～16時 OMCビル正面玄関集合後、バスで移動

参加費 情報交換会・懇親会費 無料 体験登山はバス代1000円

締切り 9月末日

問合せ 東海支部ボランティア委員会 前田まで。

✉maedaiq@gmail.com ☎090-7303-9076

令和7年度第3回(6月度)理事会
議事録

日時

令和7年6月12日(木)
00分～20時00分

19時



とこの世、夢と現実、生と死の境
界を越えながら、青冥(せいめい)を吹き渡つ

ている」と。

(図書委員会委員 荒井正人)

場所 集会室およびオンライン

(Zoom)

【出席者】

橋本会長、永田・桐生・飯田各副会長、長島・南久

松・平川各常務理事、松田・

川瀬・望月・原田・猿渡・

池田・久保田各理事、石川・

清登各監事

【審議事項】

1・神奈川支部長の交代について

(長島)(賛成14、反対0)

2・福岡支部長の交代について

(長島)(賛成14、反対0)

【協議事項】

1・役員改選に伴う書類の提出に

ついて協議した(長島)

2・総会の進行について協議した

(長島)

3・新役員の役割分担について協

議した(長島)

4・継続して取り組む事項(評議

員の選定、中期計画の検討など)に

ついて協議した(長島)

【報告事項】

1・入会者承認報告について(橋本)

2・寄附金および助成金受入につ

いて(南久松)

3・事務局長の雇用契約について

ルーム日誌 6月

2日 財務委員会 記念事業委員

会(山岳古道調査)

3日 広報委員会 スケッチクラブ

4日 山行クラブ

5日 常務理事会 YOUTH

CLUB委員会 山岳地理

クラブ 紫蘭会

6日 入会説明会

7日 アルバート峰登頂100周

年PJ

9日 アルパインスキークラブ

10日 フォトクラブ

11日 新役員説明会 山想クラブ

12日 かつぱの会

13日 理事会

記念事業委員会(国際交流)

16日 図書委員会 東京支部

総務委員会 初級者講習会

17日 募金委員会 みちのり山の

会 麗山会 沢登り同好会II

18日 東京支部 三水会 山遊会

19日 科学委員会

20日 自然保護委員会 クニ塾

21日 フォトクラブ

23日 理事会 YOUTH CL

UB委員会

25日 理事会 子どもと登山委員
会 緑爽会

26日 学生会

27日 記念事業委員会

30日 記念事業委員会(山岳古道調査
6月来室者 279名

会員異動

物故

坂本眞生(3998) 25・4・10
濱野吉生(5815) 25・3・25
渡辺恒美(9481) 25・1・16
石山正典(12023) 25・6・17
金尾誠一(13267) 25・6・10

堀内弘榮(13719) 25・4・19
田中泰道(14640) 25・5・10
退会

須藤節子(9958)

小澤桂子(11973) 静岡

芳村誠一(12274)

中川秀利(13628)

姥貝悦子(14497)

瀬古 明(15053) 東海

大谷拓哉(15375) 信濃

古田 大(15830) 岐阜

池上雅子(16292) 静岡

近藤佳代子(17038) 東海
水野昭孝(A0499) 静岡

INFORM
ATION

インフォメーション

◆秋の乳頭山から秋田駒ヶ岳へ

山行クラブ

日程 10月11日(土)〜12日(日)

集合 11日 乳頭温泉郷・孫六湯

前広場(黒湯から徒歩3分、

希望者は黒湯前泊)

行程 11日 孫六湯前広場―乳頭

山―駒ヶ岳八合目―田沢湖

高原温泉 12日 田沢湖高
原温泉 駒ヶ岳八合目バス
停―男女岳―駒ヶ岳八合目

行動時間 11日 7時間、12日 4時間30分

募集人数 10名(先着順)

費用 2万5000円(前泊含む)

費用 2万5000円(前泊含む)

申込み <https://forms.gle/bmXkPmxyemizTAJD6> から。

または氏名、かな、支部、性

別、年齢、会員番号、住所

携帯番号、緊急連絡先、保

険、前泊の有無を記載のう

え murohiyo@gmail.com

八尾寛(問合せも同様)へ。

8月7日必着。必ず登山保

険に加入。

*山行委員会は首都圏に新支部が

設立されたことや各支部活動が活

発に行なわれていることから本部

委員会としての必要性がなくなり

解散しました。新たに会員間の交

流を通じて全国の会員間で山行を

企画し実施するための同好会「山

行クラブ」を設立しました(中原)

nakahara334ron@gmail.com

◆剣岳・早月尾根を登る

山行クラブ

標高差2200mの早月尾根を

登ります。静かな剣岳を楽しむ山

行です。

日程 9月20日(土)〜23日(火・祝)

集合 20日、富山地方鉄道上市駅

改札16時05分

行程 上市駅―馬場島荘(泊)―早

月小屋(泊)―剣岳―早月小

屋(泊)―馬場島―アルプス
の湯―上市駅

歩程 4日 6時間30分 5日 6時間30分 6日 4時間

(健脚向き)

費用 4万5000円(タクシー・

宿代・保険料など)

定員 10名

申込み 9月5日(金)まで 数見

直へ ☎090・7204

・4668 sumi88t@gmail.com

gmail.com

◆いいところ歩き遍路プラス ③愛媛香川

本シリーズ3回目は、愛媛県52

番泰山寺から香川県75番善通寺ま

で順打ちします。

日程 10月11日(水)〜16日(木) 5泊

6日

集合 11日 JR松山駅改札口9時

25分。夜行バスで到着した

は前日松山泊。

行程 11日 松山―高浜―52番太

山寺―55番南光坊―今治

(泊) 12日 しまなみ海道

(大三島 大山祇神社) 13

日 56番泰山寺―61番香

園時―伊予小松(泊) 14日

60番横峰寺―64番前神寺

―伊予三島(泊) 15日 65

番三角寺―69番観音寺―観音寺(泊) 16日 71番弥谷

寺―75番善通寺―善通寺(解散)

歩程 1日1〜6時間(やや健脚)

費用 参加費3万円(タクシー、通信費など)、1日約1万円

(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自で。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 10月3日まで 数^{すみ}見直

☎090・7204・46

✉sumi88t@gmail.com

◆溝部久美子写真展 『遙か北の山にて』

場所 ニコンプラザ東京 THE

GALLERY 東京都新

宿区西新宿1・6・1 新

宿エルタワー28階

日時 7月29日(火)〜8月11日(月)

10時30分〜18時30分(日曜

休館 最終日15時まで)入

場無料

溝部久美子Ⅱアルパインフォトク

ラブ、山岳写真同人四季

mikum2@gmail.com ☎090

・4955・2452

◆編集後記◆

●37年ぶりにスイス南東部、オーバーエンガーディン(「イン河の庭」の意)に行ってきました。サン・モリッツやポントレジーナをベースに10日間ほどハイキングしてきましたが、この旅の主目的はマローヤ峠を越えた先、ブレガリア峡谷の北斜面にある美しい村、ソーリオを訪ねることでした。

●アルプスの画家、セガンティーニが不朽の三部作の一つ《生》を描いたのがこの村で、レビュファの名著『星と嵐』に登場するピッツ・バディレ北壁の眺めが見事です。また、新田次郎も佐貫亦男と訪れており、「おそらくこれほど美しいものはどこへ行ってもみられないだろうと私は思う」と絶賛しています。今回宿願が果たせ、まさに至福の時間でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 962号

2025年(令和7年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社